

○田中氏 御紹介に預かりました、早稲田大学の政治学研究科ジャーナリズムコースの田中幹人と申します。

もともとは分子生物学で博士号を取りまして、しばらくポスドクで医療研究もしていたのですが、科学コミュニケーションということが推進されるころに、一方で、学部のおきから学費を稼ぐためにジャーナリスト的な仕事をずっとしてきて、自然科学ができる、メディアもわかる人間はいないかと言われて、早稲田のほうに手を挙げたら採用いただいて、それからコンピュータを使った研究なども得意だったので、科学がメディアの中でどう扱われているかということを中心に研究しているのが私の本業です。

科学がメディアの中でどう扱われているのかを見ると、嫌でもリスクの話です。特に問題となっている部分を見ていくと、リスクに必ず直面するというところで、僭越ながら今回は主査という形で取りまとめ役をさせていただきました。

その背景の部分が私自身の考えになってしまうのは当然なので、今、御紹介いただいた部分に関しての肉づけという形で少しお話をし、皆さんの議論のたたき台になるようなものを提供できればと思っていますので、どうぞよろしくお願ひします。途中でもわかりにくい点があったら、御指摘いただければ説明いたします。駆け足になってしまひますが、御容赦ください。

(PP)

まず、震災後にリスクコミュニケーションという言葉がすごく盛んに言われるようになりました。ただ、私たちは新聞報道とかツイッターなどソーシャルメディアの様子とかを議論していると、リスクという言葉は実は違う意味で使っている人たちがかなりいる。ところが、その違う意味ということをお互いに気がつかないまま、専門家同士だったり、専門家と市民の議論というのはすれ違って、こじれていく。結果として、リスクコミュニケーションで一番重要な信頼が双方に失われていくということが起こりました。

ツイッターの様子を分析していくと、一番基本的な定義であるハザードのプロバビリテイ、確率の問題であるという工学的な方々のリスクという言葉の使い方があれば、一方で医学的・理学系の研究者などは、暴露量を気にしてリスクという言葉を使っている場合もあれば、社会科学とか心理学系の方は、まずリスクの前提となっているハザードに対する感情が気になっています。

上記2つはかけ算ですが、下が足し算だという、これはピーター・サンドマンという研究者の言い方ですが、つまりハザードがゼロであっても感情的に受け入れがたければ、やはりリスクは気になるという、ここの部分を社会学と心理学の方は、そこをどうすべきかということに関して話している。こうしたリスクという言葉の使い方がごちゃ混ぜになってしまひているので、なかなか整理がつかないというのが震

災後の状況だったのではないかと思います。

多くの場合、専門家の大半は、専門性というものを獲得する過程というのは、基本的に偏見を獲得する過程でもあります。つまり、ある位置から物が見られるということは、逆にその位置からしか見えないということでもあるので、同時に自分のリスク感というものを、何でおまえは俺のリスク観がわからないんだという形で押しつけ合う。これは市民と専門家の間だけではなくて、専門家同士の間でもあったということは、やはり指摘されてしかるべきではないかと思います。

そして、それは今も続いているのではないか。例えば、低線量被ばくに関しては、疫学的な考え方と病理学的な考え方は少し違います。それがその2つの間で甲状腺がんに関して議論になっているというのは、皆様は御存じのとおりではないかと思います。

(PP)

今回の報告書で、ほかの委員とともにしっかり盛り込まなければという議論になっていたのは、欧米では必ず前振りでこういった観点や定義の整理があった上でリスクコミュニケーションの話をしているのですが、今まで日本のリスクの話にかなり抜け落ちていた点でもあります。今までのリスクの話でも、科学的な意味でのリスクという話、ハザードとハームのプロバビリティということに関しては入っていたのですが、行政文書だからこそ必要な視点、つまり政治学的・社会学的な視点と心理学的な視点については無視されることが多かったと言えます。

現在のリスクコミュニケーションと言った場合には、この3つの軸の中でしかリスクというものは扱いようがないというのがスタンダードだと思いますが、これが定義としてなかったので—この場では釈迦に説法な部分が多いと思いますが—新しくリスクについて考えよう、そのリスクにコミットしようとしてくる方は、この2番目、3番目の視点が抜け落ちてしまう。これらのことを何とかうまく盛り込もうということをやりました。

特に2番目で言えば、ウルヒベックなどが言うような、個人を取り巻く社会的な文脈によって、すごく異なる意味を持つとか、リスクというものは社会的弱者に対して非常に不平等に分配されるもので、決して確率論だけで語れない。

例えば、これは私と私の共同研究者の出したものですけれども、震災後の自治体ごとの津波による死亡率を見てみると、震災前の段階で世帯平均収入が少なかった自治体ほど死亡率が高いです。津波という自然のリスクにおいて、金銭の経済的な状況と同じように不平等に死が分配されているとしか言いようがない状況があったりする。

もちろん、これは単純でなくて、貧しい地域ですと家が密集して海沿いに建っているとか、そういった理由もあるのですが、結果として見ると、リスクは科学的だけではなくて、社会的にも非常に不平等なものになり得るということ。この視点を忘れてしまうと、単純な科学的リスクだけで語った場合に、非常に不公平感を社会に巻き起こすことがあるということなんです。

心理学的なリスクという点でも、我々はどのようにリスクを認知して選択するとか、こ

れは皆さんも当然ながら、さまざまなリスク選択を自身の価値観に沿って行っているわけで、この点をどうやってバランスを取っていくのか。異なるステークホルダーが異なるリスク価値観を持っていますので、これのバランスを取っていくかということのを何とかコミュニケーションという観点に盛り込むのかということを考えています

(PP)

私たちの日本社会においては、科学コミュニケーションという活動は1999年のブタペスト会議以降、文科省、農水省、BSEとかの問題も踏まえて、環境省も含めて、それぞれやってきたんですね。しかしだからこそ、「科学コミュニケーションをやってきたのに、リスクコミュニケーションができないのは何でだ」という話は、震災後にかなり議論になりました。

当然ながら、科学コミュニケーションは平時から有事にかけて、いろいろなフェーズで重なり合っているのですけれども、科学コミュニケーションと言われて推進されてきたものは、科学の面白さとか、科学知識をいかに伝えるかということで、それを踏まえて、どういうふうに社会選択をしようかということのをふまえた議論は余りなかったんです。

これは私の専門としているメディアの分野ですけれども、メディアでも国際的な学会とかで議論をしていると、サイエンスリポーターとサイエンスジャーナリズムを分けません。つまり、サイエンスリポーターというのは、科学でどんな発見があったかという話をいかにわかりやすく伝えるか。

一方で、それを踏まえて、どういう社会選択をするのかという議論を行うメディア行為はジャーナリズム。これは科学だけでは決めようがなくて、ジャーナリストが仲介して政治家とか市民とか、いろいろな人たちを巻き込んだ議論をメディアというフォーラムの中でやっていくことで初めて解決できること。ここはリスクコミュニケーションのステージになるわけです。皆様はこの分野で尽力されてきたと思いますけれども、こういったことは日本全体としてはやってこなかった部分があるし、研究者そのものもそういった訓練を受けてきていない部分があるのではないかと思います。

ちょうど私は先週、ヨーロッパに行っていたのですが、呼ばれたのはヨーロッパのいろいろな原子力とか環境の学生を集めて、リスクアセスメントの集中セミナーをやる。2週間缶詰でやるのですが、最後の2日はリスクコミュニケーションをにらんで、リスクの心理学の話とか、私が担当として呼ばれたリスクとメディア論の講義を受けさせる。受講者はいずれ科学者や行政担当者になり、自分たちのリスクアセスメントをそれぞれの立場でやるけれども、社会の中ではそれが絶対的な価値観ではなくて、それらを統合して、EUの中でどうやって議論をしていくのか。また、そのEUの議論の結果を各国がどうやって選択するのかということに、専門家がいかに入っていくのかという訓練を大学院生からやっているんです。

これは博士課程の中で多くの大学で必修になっているそうです。大学院教育に限らず、そういった訓練を教育の早期の段階からやることで、ステークホルダーそれぞれがリスク

コミュニケーションの知識を持って議論するなかで、うまくやらせようということを各国は取り組んでいると理解しています。

(PP)

今話をOECDのバックグラウンドペーパーの中に落とし込むと、こういった形になると思います。リスクは発明も発見もされます。新しく発明されるようなリスク、再生医療であるとか、新薬を社会投入することもありますし、これまで知られていなかったものに発がん性が見つかるとか、そういった発見されるリスクもあります。

こうしたときに社会に論争をもたらすわけですが、バックグラウンドペーパー、これは慶応大学の吉川先生の整理に基づいて、私がさらに改編したものですけれども、これは先ほどの図に照らし合わせた場合に、リスクコミュニケーションはちょうどこの1段階と2段階、特に2段階と言えると思います。

1番目は、専門的な知識を分配して普及する段階。これは科学コミュニケーションの色が濃いステージです。まだリスクが全然顕在化していない状況では、こういったリスクというものが見つかりましたよ、こういったものをどう考えましょうかということやハザードの程度とか、リスクの生起確率ということや踏まえつつ、社会でできるだけ広く共有する。

その次の段階として、リスクが現実味を増してきたならば、対話の段階に入ります。リスクに対して政策を決定したりとか、どの程度、社会受容をするのかという段階では、コンセンサスコミュニケーションと言われますけれども、本格的なリスクコミュニケーションの段階に入ってくる。こうなってくると、利害関係者を巻き込んで、公共の中でリスクとベネフィットをどうやって選択するのかというコミュニケーションが必要になってくる。

この辺はヨーロッパとかアメリカのNRCの報告などを見ていると、カタストロフィとかクライシスの状況は実は結構突き放して、もう社会的な混乱状況になっていったら、実はそんな簡単には解決できないということは、もうはっきり書いているんです。そうなってしまったら、ある意味であきらめて、少しずつ手当をして、回復を目指していくということが最後のクライシス、カタストロフィ、混乱期における状況。これに対処するには、できれば予め、責任の範囲を明確にして、ある種、権力側が主導をしなければいけない場合もあるよねという割り切った考え方です。そのかわりに、いかにして、できるだけ落ち着いたステージに持って行って、1回決定したリスクをどういうふうにもう一度、線を引き直そうとか、そういったところののりしろを残して考えていくかというのが一つ重要なことだと思われまます。

(PP)

その中では専門家というものの扱いが一つ重要な問題になってきます。それは何かというと、これはリスク研究の第一人者でもある、これはブラウ・フィッシュホフたちのデータですが、パンデミックH5N1、鳥インフルエンザのとき、ウイルスが変異して強毒化する可能性はどれくらいあるだろうかというアンケートを専門家に取った例ですが、医学の専

門家集団は黒で、変異の危険性が見積もりは分かれています。強毒化するかもしれないという人はそれなりにいるのだけれども、これがメディアで報道されるとどうなるかという、両論併記をして、さらにこちらの「安全」という見積もりを強調して書かざるを得ないです。そうすると社会的な印象としては、大丈夫なんだという印象が強くなる。

でも、いざ起こると、これが例えば、BSEのときのように、後で実は逆だった、やはり危なかったという話になると、専門家は、俺たちは警告していたよと言うけれども、社会の側は、専門家は安全だと強調していたのではないかという話になってしまう。こういった難しさがある。

一方で、準専門家というのは周辺領域、これは例えば、分子生物学者などのウイルスなどを普段扱っている人間が、強毒化とか変異の可能性はどれくらいあるでしょうかと聞いてみると、意外と結構高めに見積もったりする。この辺の専門家の相場観の、どちらを社会は求めているのかという、実は両方欲しいはずです。純粋な専門家と準専門家みたいなものの相場観をもって、初めてリスクの相場観は見えてくる部分があると思います。これらをいかに社会の中で共有していくのかというのは、すごく難しいことであり、また、これは実際にジャーナリズムの現場では、どうやってこの相場観を紙面や番組で反映し得るのだろうかということは、今、私たちが抱えている課題ではないかと思います。

実際に震災後のネット上では、こういった問題に関しまして、SF作家である野尻抱介さんという方がツイートしたのですけれども、いろいろなことを考えたときに、定常性バイアスが働いて、本当の分野の専門家はかなり安全寄りに語る印象が目立つんです。原子力の専門家はデータが欠損していてよくわからないという状態だと、どちらかという安全なほうを取る。安全というか、確実性というか、何も起こっていないほうを選択してしまう。第一種のかごを選択する。ところが、このときに早野龍五さんとか有名な物理学者の方たちは、割合そういったところは単純にデータだけで分析してやることができる。そうすると市民の反応として、原子力関係の研究者はバイアスが かかっていることが非常に多いので、あてにしていない。3.11以降にわか勉強した理学系の人の方が中立的でノイズが少ない。理学系が偉いというのではなくて、問題を理解する素養があって、にわか勉強をした人たちのほうが、ある意味で適切なリスク判断をしていたんだということが、私たちが震災後に痛感したところではないかと思います。

もちろん純粋な意味での専門家は要らないというわけでは全くなくて、これらをリスクコミュニケーションの中で、どうやってステークホルダーを巻き込むというのは、こういった相場観というものをどうやって演出していくかというのが重要かと思います。

(PP)

この後の数枚のスライドでは、リスクコミュニケーションの教科書の一部の中で、これはもう当たり前のことなので、いちいち確認しませんが、幾つか箇条書きで挙げましたが、バイアスがかかるということをどうやって共有していくのか。バイアスに関しては、専門家自身が持つバイアスを自覚してもらうというのは多分すごく重要なことで、そ

うでないと言い方に大分差が出てきてしまう。

そのバイアスを自覚した上で、こういったコミュニケーションの中での語り口をしていくのかということが重要であるというのが一つポイントとしてありますし、特にこの場で重要なのは、リスク認知が高まるハザード条件は、子供たちに対するリスクとなる時きだということです。

震災後においては、そのことが見落とされたシーンはたくさんありました。私たちは多くの専門家の方にリスクコミュニケーションの際のアドバイスをさせて頂くことがありました。その際には、どうしても「そういう語り口は適切ではありませんよ」というアドバイスをさせて頂き、しかししてしまつて炎上した事例も多数ありました。この場合で一番配慮すべきだとアドバイスしたことの一つは—今、言うどうしても後出しじゃんけんですけれども—子供を持つお母さんというものをまず念頭に置いてくださいということです。ある方は人前で語ることをすごく恐れていたのですけれども、その方はちょうど小さい子供を持つお母さんである研究者であったので、あなたこそ、むしろ出てください、あなたこそ、一番感覚的に語りやすいはずです、と申し上げました。むしろリタイヤしてしまつていような研究者は、かなりその辺は無神経なコミュニケーションの言葉の選び方をした例が多く、そのために不安を巻き起こした部分がありました。

これは、先ほど言ったような、リスクが非常に社会的に不公平なリスク分配が予想される時き。これらの時きにそれらのことを念頭に置いたリスクコミュニケーションができるかどうかというのは、すごく重要なポイントになってくる。そして、先ほども繰り返して出てきましたが、「信頼」というのは非常に難しい言葉であります。信頼とは何なんだというのがそもそもありますし、また、かりそめの信頼が一時的にできたように見えても、それが崩れてしまうと、逆にバックラッシュが激しくなることがあります。

例えば、震災後にツイッターで枝野官房長官の会見に関して、どんな反応をツイッターで人々がしていたのかということ私に私の学生が分析してみました。そうすると、すごく信頼していたです。震災直後の記者会見は、回を重ねるごとに官房長官は信頼されていくんです。ところが、ここで危ないのは、言っている内容にではなくて、雰囲気や信頼しているんです。その様子を幾つかの指標をもって測定してみたところ、数億のツイートをプログラムを使って分析をしているのですけれども、すごく高まっていくのですが、内容ではなくて、態度に対して信頼していく。そうすると後で、「直ちに影響は無い」とは何だったんだみたいな話で、揺り戻しが激しいわけです。

これが難しいところ。一時的な面での信頼はすごくうまく行っていたんですけども、その時きに実は、枝野さんの言い方の何がまずかったかではなくて、中身がうまく伝わらなかった。この情報の意味の共有は相互作用ですので、枝野さんの言い方がまずかったのでは必ずしもない。

でも、結果として、そこでうまく信頼というものができていなくて、特徴的なのが後半になると、「枝野かわいい」とかいう言葉がツイッターではいっぱい出てくるんです。

つまり、ある種のマスコット化して、信頼されている。最初のうちは頼もしいとかいうキーワードが出てくるんです。後半くらいから、かわいいとか、「枝野寝ろ」とかいったハッシュタグが出てくるころには全幅の信頼を置いて、中身を吟味しなくなってしまう。

これはすごく危ない状況で、信頼してもらうのは前提であるんだけど、言っている言葉の中身をいかに吟味してもらうかという方策を次に練っていかないと、今度は逆にしっぺ返しが来てしまうということが言えるのではないかと思います。これはソーシャルメディアなどでは、すごく問題になります。

(PP)

これも私がやっている研究から見いだされた結果ですけれども、震災後の放射線議論に関して、熱心に議論をしている人たちを抽出して、説明は省きますけれども、これは一つの点は一人一人の人です。緊密に話し親密な関係にあるほど近くに配置され、全体としてどのように関係性があるかということを平面上で表現しています。

これが興味深いのは、青が科学者の人たちです。赤が警告を発している人たちです。この中には科学者もいるのですが、危ないのではないかというのと、どちらかと言うと安全だと言っている人たちと対置した場合、安全だという声のこちら側に科学者がすごく含まれている。ここで問題なのは、この議論空間で市民が分断されてしまっていることです。この人たちは安全だという声も、危険ではないかという懐疑的な声も聞こえています。ある意味では、リスク情報を均等に取れている人たちです。

この人たちは完全に安全だという声しか聞こえなくなっている人たち。これはこれで実はリスク情報としては非常に危ない状況です。こちらの人たちはこちらの人たちで、もうおしまいだ、もう危険に違いないという正常性バイアスが働いてしまっている状態です。

公共のリスクコミュニケーションで言った場合に、実はこの2つのコア、それぞれの情報提供源、この人たちが間違っていたわけでは必ずしもないわけです。しかし特に専門家集団の中での正常性バイアスも非常によくないほうに働き、危険の可能性を検討すべき役割を期待されているときに、専門家としての相場観を出せないこともしばしばある。

青と赤のクラスタが両端にあって、その中間にさまざまな市民の意見集団ができるというのが理想のはずですが、当然なんですけれども、どうしても声の大きい、さまざまな専門家によって分断されるということが起こってしまう。これは危険な状態であり、こういった状況を回避するというのが、私たちが目指してしかなるべき社会ではないかと思います。

(PP)

まとめつつ行きますけれども、これは皆さんは御存じのことかと思いますが、リスクメッセージというものをどうつくるかということ。これはラングレン&マクマキンとか、さまざまなリスクコミュニケーションの教科書からクレイグ・トロンボという人が7項目でまとめたリスクコミュニケーションのコツけれども、まず表示されているのが「メッセー

ジは明快でわかりやすくなければならない」ということです。ただし、わかりやすさということが、先ほどのサイエンスコミュニケーション的なやり方、科学コミュニケーション的な科学の知識をうまく伝えるというわかりやすさだけを追求した場合に、必ずしもそれはリスクにとって適切ではないかもしれない。

わかりやすさを追求するということは、同時にリスクの複雑さを必ず縮減します。多様な選択肢の可能性をAかBかという形で凄く縮減してしまうわかりやすさを伴いますので、これは同時に情報を欠落させていくことによってわかりやすさを実現していることでもありますから、後で情報が欠落していくわかりやすさの性質を「隠ぺいしていた」と誤解されると非常な信頼の損失を招くということがあります。これは非常に難しいという点だと思えます。

起こり得る誤解に関しての注意を払い続けること。これも頭ごなしに誤解を正そうとするということが、しばしば起こった震災後の失敗だった例ではないかと思えます。何でおまへはわからないんだ、これをわかれという形は、態度の硬化を招きこそすれ、それで説得されることはないものです。

震災後、科学者の方々が「説得したら、市民の方が納得してくれた」と仰る例が幾つかあって、それをつぶさにインタビューとかして調べてみました。大体そういったケースは、実際には「説得」によって納得したのではないです。大体何らかの別の理由があって、最初に負担だった心理状態が解消されたというのが一番大きかったです。

こうした問題は、御本人も気づいていなかったりするのですが、例えば、避難に対する不安というのが、補償が降りることになって、ちょっとほっとしたとか、あるいは夫と別れて住むかどうかということ。そういった、震災後に心理的に一番引っかかっていたことが放射能に対する不安に対して、ネット上では非常な不安を吐露していたが、ふと落ち着いて、リスクというものを自分で吟味するようになってきたとか、そういったものの理由が大半で、実を言えば、説得されている例はほとんどないです。それを思うと、頭ごなしに言うのは、非常に危険だといえます。

3番目、これは多分、専門家の方々と話をしていると一番危ない部分だと思うし、今回のリスクコミュニケーションの議論の定義では、すごくたくさん議論をした部分だったのですけれども、「情報を提供することと影響を与えようとするものの区別について、自覚的でなければならない」という項目です。これはリスクコミュニケーションに参加する全てのステークホルダーにとって、一番重要な点ではないかと思えます。これを失敗してしまうために、多くの問題が起こっています。これは影響を与えようとするのがだめだと言っているわけではないです。だけれども、影響を与えることと情報提供を区別するということは一番基本ではないかと思えます。これを失敗するがために、リスクアクセプタンス、リスク受容を目指している説明会をリスクコミュニケーションと題してやってしまう。

福島でヒアリングをしていると、リスコミ、リスコミと刷り込みに来るんだよねというダジャレを聞くということを複数の研究者から聞きましたが、それは確かにこれを失敗し

ている例だと思います。こうであれば、多分それは刷り込みをしようとする方は、これが一番リーズナブルな合理的な選択だよというのがあるために、それを選んでくださいというところに誘導しようとしてしまう。

この場合に重要なのは、なぜ自分がそう合理的だと思ったのかという情報を提供することです。やはり区別をして、こうこう、こういう理由で判断をなかったけれども、私はそちらの選択は合理的に思うというような分けた話し方もできていないということが、例えば分析をしていると、リスクコミュニケーションの失敗例として一番多い状況ではないかと分析できると思います。

(PP)

あとは個人に対する影響を提示する必要。これはすごく震災後のうまくいった例、うまくいかなかった例というのは幾つか見ていると、例えば、食品安全の分野で言うと、三重大の勝川先生の著書で、最後に書かれていて上手い説明だと思ったのは、放射能汚染が心配な消費者に対して、どういった魚を食べるかという選択と、何を信頼してどういった基準をあなたが選ぶのかという選択を結びつけて説明していることです。つまり生活者目線で、これくらい不安がある人は、ヒラメはやめておいても、これは食べてもいいですよとか、そういったある種、魚に落とし込む形で説明した。

これはすごく生活文脈に落とし込んでいて、結局、最終的な選択というものは、ここでは魚に関してだけですが、結局それは魚の選び方を示しているようであり、リスクの考え方を教えている。こういったことはいいアドバイスになっているのだろうということが言えると思います。

あとは難しいのは、不確実性の明示の仕方です。なぜ、ある観点を選択するのかを明示するという、手続的な公正性というものをどうやって示すのか。これは特にヨーロッパは、チェルノブイリとか、BSE以降、相当気をつかっている部分で、あるアドバイスをしたときに、どういった倫理観、どういった科学的判断に基づいてやったのか。その科学的判断の背後にあるのは、どういった倫理観なのか。こういったところをかなり説明や報告でははっきり書きます。

ICRPのレポートに対して、対抗的だと言われて、日本では評判の悪かったECRRのレポートも、ECRRはこういった倫理的議論のもとに、私たちはあえて、こういう強力な科学的バイアスをかけたデータの見方をしますよということは、冒頭文でかなり強力に宣言をしている。自分たちはこういうバイアスがかかっていますと言っているんです。でも、なぜか知らないけれども、日本の議論のときには、そこはすっ飛ばされて、あれはすごく変な議論を引っ張ってきているから、だめなものだと切り捨ててしまう。それは前提、オードブルの吟味を飛ばしてしまっただけで、主菜の言っているから、それは食当たりを起しているのだろうという、それは情報の使い方として、間違っていたのだろうと思います。

特にリスクコミュニケーションの点では、私が同席していた中でも、ICRPのデータに関して説明している先生方は、ECRRのレポートでこういうのを見たのですが、あんなのはだ

めですと言って終わってしまう。ところが今やネットで両方を読む市民も多く、そのためにECRR報告書だって論文に基づいているわけでしょうと思われてしまうわけです。そういうところをいかに説明するのかということが難しい点ではないかと思います。

6番目、リスク比較を使いこなすのは非常に難しいと意識しなければならない。これはすごく方法論的な部分ですが、これをまとめたクレイグ・トロンボが7項目にわざわざ入れていることに注目すべきだと思います。これは私も痛感していることでもあります。研究者は基本的にリスク比較をしたがります。これも訓練されてしかるべきではないかと思います。これに関しては、すごく簡単に述べますけれども、私たちのデータで示します。御存じかと思いますが、古典的な研究としてヴィンセント・コベロが89年にリスク比較表現の有効性を5ランクに分けています。

第1ランクが非常に受け入れられるリスク比較表現で、5番目がほとんど受け入れられないもの。これは震災時でも農水省さんで既に翻訳をしてあったので、すごく助かりました。私もいろいろな人に教えるのに、このURLを読んでというふうにやりました。これで見たときに、実は震災後に見ていると、第4ランク、第5ランクの、余り受け入れてもらえないリスク比較をされた方がすごく多かったんです。

例えば、山下俊一さんは、今の被ばく量はたばこ1本分くらいですからという話を福島でなさいましたけれども、私が後日、飯館村でヒアリングをしたときに、地元のお母さんからは、たばこ1本分はまるで私の赤ちゃんにたばこ1本を吸わせたみたいなものでしょう、気持ち悪いわと言って、大人になってからのたばこ1本と、赤ちゃんのたばこ1本は違うわよねと念を押されて、違うかもしれませんねという答え方をせざるを得ませんでした。

こうしたリスク比較表現が、実際にツイッターでどういうふうに反応をされていたのかということ調べてみました。メディアでそういったリスク比較表現をしていたものがかなりたくさんあったので、学生と手分けをして、新聞だけではなくてテレビからも拾ってきて、当該発言のスクリーンショットを起こして、それらに対して反応しているツイッターを人の名前とかで拾ってきました。ツイッターの全ログ、50ギガくらいあるログの中から拾ってくるわけです。その名前を拾ってきて、3日間くらいの反応を肯定的な反応から否定的な反応までコーディングします。

最終的には複数人で評価をして、その複数人でどれくらいが一致するかというのをそれぞれ専用の指数で評価したのですが、結果はこれです。もちろん、こういったものはどうしても自然科学の実験ほど、うまくいかないのですがそれでも、これはコベロの言った「いい比較表現」ほど、受け容れられていることを示しています。

5番目は悪い比較表現です。相関には過ぎないけれども、いいとされているリスクコミュニケーションの戦略を取ったほうが受け入れられている。ツイッターですので、この研究者はすばらしいと褒めるコメントは余りないですけれども、まあまあ受け入れている人たちがいれば、一方で、この人の言うことは信用ならないという反発しているパターンが

ある。ある程度の相関みたいなものが見える。

また一方で、1番のエラーバーがすごく長いのは、これはコベロの言い方だと、事前に協議された基準というものを引用してしゃべるのはいいことだと言っているのですが、震災後、特に3カ月くらいの初期の時点でICRPレポートは余り読まないで、ICRPレポートは100ミリシーベルト以下は影響がないと言い切っているとか専門家がやってしまうわけです。

ところが同時に、皆さん御存じのように、ICRPレポート自体、市民の手でどんどん翻訳されていきました。普通の方もどんどん読んでいきました。ICRPレポートはそんなことを言っていないじゃん。専門家は我田引水で「安全ありき」で、これまでの研究、チェルノブイリのデータとかねじ曲げて発言に使っているよね、となってしまう。あの専門家は信用ならないというのは、この1ランクというところでどうも多くて、そのためにエラーバーは特に長くなっているというのが見立てでも言えます。このデータから言っても、適切にコミュニケーションをするということの重要性は意識され過ぎて、され足りないということはないのではないかと思います。

(PP)

こういったものを含めて、「リスクのメッセージは能う限り完全でなければならない」とトロンボは纏めています。これは非常に難しいことですが、リスクマネジメント、リスクアセスメント、リスクガバナンスと言ったものと、どうやって接続性のあるコミュニケーションを行うか。そして、何に軸足を置いたコミュニケーションなのかといったことが意識されながら行われるべきでしょう。コミュニケーションというのは単独ではなくて、〇〇においてのリスクコミュニケーションというものがあると思いますし、アセスメントにおいてもリスクコミュニケーション、ガバナンスあるいはマネジメントのためのリスクコミュニケーションがあります。こういったどの段階であるかということ意識されながら、いかに実施していくかということが改めて求められていると思いますし、その点でこれからの取り組みが期待されていると思っています。

(PP)

まとめですけれども、ウルリッヒ・ベックなども指摘しているとおり、これから私たちの世界はリスク社会へとどんどん向かって行って、さらにこれが国内だけでは無い問題となっていくと思います。福島原発も他国から見れば、飛来するリスクですし、PM2.5などのリスクも、そこにさらにナショナリズムとかが関わってくると、さらにややこしいわけです。

そういったものの中で、「信頼」というものを評価主体との間で築くというのはすごく難しくなってきます。私は非常に興味深かったのは、報告書をつくっていく議論の中で指摘されたことです。これまで日本社会は、リスクはお上が管理してくれることが普通だったんだよねと。

これは霞が関の方から出て、私はそのとおりでだと思ったのは、「確かにおっしゃることはそのとおりでけれども、このリスクコミュニケーションを推進していくに当たっては、

私たちは反発を受けますよ」とその官僚の方は仰ったんです。あなたたちは責任放棄するんですか、と言われてしまうと思いますと。あるいは行政がいかにもリスクを地域の人々と評価するかという取り組みを始めたときに、あなたたちはリスク管理を止めるんですかというような誤解を受けることがあるのではないかと。これは最もな危惧であり、

このリスクを市民一人一人が理解して対処する社会というのは、同時に政府や専門家がリスクの責任管理を放棄した社会と受け取られかねない。実はリスクコミュニケーションというのは、責任と権限の再分配が行われるということを社会の構成員が納得することでもあります。これまで責任はお上がお上が負っていて、人々はお上の言うリスクを判断すればよかったというだけでは済まなくなってくる。それはなぜかという、個人選択のリスクが否応無しに増えてくる社会において、どういう世界に私たちは生きるのか。これはどういう落とし所に行くのかというの、日本社会のこれからの難しさだと思います。

最後に、繰り返し出てきました、統治者視点と当事者視点。これはすごく難しい問題であって、必ず解消できないという、ある種、あきらめに似た表現から繰り返し使っています。でも、これはしようがないと言えば、しようがないですし、同じ人も統治者視点で考えるときと、当事者視点で考えるとき、これは科学者でも両方の立場で考えるわけです。でも、両方の視点があるんだということを意識することは重要だと思います。

これは最近の私の学生の研究成果の私なりの解釈ですが、ポリオワクチン報道がどういうふうを受容されているかを分析していくと、最初のほうのポリオワクチンの生ワクチンと不活化ワクチンの報道に関しては、ある種、科学的な議論をしているんです。そうしたときに、全然議論はうまくいかないです。安全か危険かの二者択一になってしまう。

しかし比較的最近の報道では、これは記憶に新しいところであるように、厚労省vs黒岩知事みたいな図式になってしまったんです。これは一見よくないことですがけれども、逆に黒岩知事が市民感覚の代表みたいな形になったんです。そうすると実はリスクコミュニケーション的には、すごく受容されます。つまり、問題の図式がうまく伝わっていく。不活化と生の利点・欠点とか、そういったものが正しく認知された上で選択というものになった上で、結果的に両者も益した形になり、議論が加速するわけです。このように、統治者と当事者視点というものをうまく社会が意識して使っていくということは重要ではないかと思っています。

最後に繰り返し出てきましたように、コミュニケーションは「意味を共有する過程」というのが一番シンプルな定義です。共有されなければいけないので、双方に態度変容の準備がなければコミュニケーションは絶対に成立しません。これを報告書の中では繰り返しプッシュさせていただきました。この議論の報告書が、改めて今後のリスクコミュニケーションということに貢献できたらと思っています。

済みません、駆け足になりましたし、ちょっとオーバーしてしまいましたけれども、以上、報告を終わります。この後、質問をいただければと思います。よろしくお願ひいたします。